



森林と人を 生かす知恵 150

歴史をつなぎ山の景色を

「感謝」に変えてくれた先輩の一言

森林文化アカデミー 准教授 ● 塩田 昌弘

先日、ある集落で山主さんと話

している。「山のてっぺんまで、スギ・ヒノキがあるけど、人工林って災害に弱いし、花粉も飛ばすし、なんで、こんなにも多くの人工林があるのか？」と問いかけられました。森林林業に携わっていると、しばしば受ける質問かもしれません。

皆さんならどんな風にこの疑問に答えますか。私の場合、こういった疑問に接した時、いつも頭の片隅に浮かんでくる写真や図、映像、そしてかつて頂いた大先輩からの一言があります。今回は、その一部を紹介できたらと思います。下記二次元コードから写真などが探せますので、ご覧になりながら読み進めていただけると嬉しいです。

○100年前の山の様子

(田上山を例に)

まず写真、滋賀県南部大津市の田上山（たなかみやま）の大正時代の様子です。花崗岩地質と（藤原京や平城京建造など）古くから立木を繰返し使ってきた結果の光景で「万年雪が積もったようなはげ山」と表されていました。現在、身の回りの山々を見ていると想像できませんが、100年ほど前、はげ山は日本各地にあり、珍しくなかったのです。

○治水三法と災害規模の変遷

次に、論文「国土の変遷と災害」

中の図（1件の風水害による死者数と人口の推移）です。この図では、この100年ほどの森林の充実と治水の賜物で、土砂災害の規模が確実に小さくなり現在に至っています。

ることが説明されています。（近年の気候変動による豪雨災害は別ス

テージ）

○生涯をかけ天竜川を治めた偉人

また、度重なる洪水を経験し、その治水に生涯をかけた金原明善翁の逸話も頭の片隅に。翁は、私財を投じ地域のため次世代のため堤防工事や植林活動を行いました。その程の決意をさせる土砂災害が、ほんの150年前の浜松市であったことを教えてください。

そして最後、大先輩から何度も聞いた昭和40年代以降の造林期の話。県内各地に裸山が点在していたこと、年間数千haもの植栽事業があり、山村地域の大きな雇用であったこと、知識や技術に未熟な面もあったこと、それでも、当時の人々に懸命だったこと。

そんな話を繰り返し聞くうちに、山を見上げると「何百本も苗木を担ぎ、てっぺんまで登り、額に汗して植栽する諸先輩方の姿」が見えるようになってきました。

植栽不適地への造林や行き過ぎた拡大造林も事実、同時に、当時の汗のお陰様で当たり前に緑に覆われた山があり、災害が減ってきたこともまた事実。

「あんなに山のてっぺんまでスギやヒノキを植えて…」そう口にしていた20年前の私に、様々な昔話は、学生時代に教わった荒廃した森林の姿と、目の前の森林の姿、その点と点をつなぎ、まず感謝と共に目の前の山を受け入れ、それから現実的な問題に向き合う、そんな目を与えてくれました。

昔話を聞いた大先輩との散歩の時間は、肩を寄せてきてつばやく一言「罪を憎んで人を憎まず」と、大きな笑い声でよく締めくくられました。僕の大切な歴史の授業でした。

